

【外来（腎臓病外来）】

腎臓病外来 延べ 1,437名（前年度1,416名 対前年比+1.5%）を診療。

慢性腎臓病（腎硬化症、慢性糸球体腎炎、糖尿病性腎症、多発性嚢胞腎、間質性腎炎、腎移植ドナーなどの片腎、ネフローゼ症候群など）や、健診後の蛋白尿や血尿の精査、急性腎障害や慢性腎不全急性増悪の精査治療、糖尿病、脂質異常症、高血圧症などがその内訳であった。そのうち1割が、CKD（慢性腎臓病）連携パス使用外来患者（延べ151名（前年度142名）であった。（参考：2009年7月～2017年3月CKD連携パス使用 延べ1,092名（年平均延べ患者数約140名））。

〈上天草地区CKD連携パスについて〉：

2008年当時、熊本県は全国的に見て人口当たりの透析患者数が多く、その熊本県の市町村の中でも上天草市は多いことから、地域の開業医の間で透析導入となる患者を減らしたいという熱意が高まり、CKD患者を腎臓専門医と共同診療する上での疾患管理ツールとしてパスを共同で作成、2009年運用開始となった経緯がある。それから約8年継続してパスを用いて当院とかかりつけ医と連携し、CKD疾患管理を行っている（患者数の推移は図1参照）。

2014年までの検討にて、CKD診療を当院専門医で行っている患者群と比較しても経過中腎機能の改善がみられる割合はパス使用群でも同等に認められ、開業医と腎臓専門医との併診が上手くいくのにパスは有用であることが示された。パス使用の効果としては、血圧コントロールもより良好であることがわかり、CKD患者教育においてもかかりつけ医との併診の有用性が示唆される。2016年1月より、随時尿による1日塩分摂取量をパス返書に付記した。地域の開業医とのCKDパスについての検討や、上天草CKD連携パス運営会主催のCKDに関する学術講演も毎年定期的に行っている。

今後も引き続き、連携パスの継続と、改定に取り組んでいきたい。

【入院担当患者概要 全160名

（前年度147名、対前年比+9%）】

疾患別患者数の内訳をみると、腎臓内科系疾患（腎炎・ネフローゼ、腎不全（慢性、急性）、尿路系感染症、電解質異常・代謝性疾患など）が約3割を占めた。疾患別でみると前年は脳血管障害、呼吸器疾患の担当患者が一昨年と比べ2～3倍と増加していたが、呼吸器疾患はさらに昨年の倍となった。整形疾患は前年の3倍となっていた。

	()は昨年度
・腎炎、ネフローゼ、腎不全	22名 (24名)
・尿路系感染	20名 (31名)
・電解質異常・糖尿病など代謝性疾患	10名 (17名)
・泌尿器科疾患	8名 (6名)
・脳血管疾患	30名 (28名)
・循環器疾患	0名 (4名)
・整形形外科疾患	19名 (7名)
・呼吸器疾患	35名 (17名)

・消化器疾患	6名 (8名)
・その他の疾患	10名 (5名)

〈多発性嚢胞腎に対するトルバプタン内服の導入〉

クリニカルパスを使用し、入院にて多発性嚢胞腎に対するトルバプタン（サムスカ®）内服の導入を2015年度から開始し、3名の患者に導入を行った。2016年度は新たに1名導入した。腎容積増大率の減少およびそれに伴う腎機能障害進行速度の抑制を期待して、より多くの多発性嚢胞腎患者へのトルバプタン導入を今後も行っていきたい。

〈慢性腎臓病患者に対する教育入院〉

クリニカルパスを用いた慢性腎臓病患者に対する教育入院を2016年度より開始した。

医師、看護師、薬剤師、検査技師、理学療法士による地域医療のニーズに合った教育指導を行っていく。

〈腹膜透析外来の開始〉

2016年度から済生会熊本病院の協力のもと腹膜透析外来を開始。現在2名の患者が通院されている。腎代替療法の1つとなる腹膜透析を、患者が希望すれば選択できるという医療環境を整備していきたい。

【講演会活動】

演題名「熊本県上天草地区CKD連携パスの現況と成果」第59回日本腎臓学会学術総会（パシフィコ横浜 2016年6月19日）に於いて、ポスター発表を行った。